

普遍的価値と集合的記憶を踏まえた国際和解学の探究



研究代表者	早稲田大学・政治経済学術院・教授 浅野 豊美 (あさの とよみ) 研究者番号：60308244
研究課題 情報	課題番号：23K20033 研究期間：2023年度～2029年度 キーワード：ナショナリズム、和解、人権、集合的記憶、感情

この国際共同研究の重要性・面白さは何か（研究の目的と意義）

● 集合的記憶と普遍的価値のダイナミズムを読み解く

東アジアにおいては、経済発展による民主化が成功しても、なお歴史をめぐる紛争はやまない。それどころか悪化することさえある。世界でも大衆に支持される紛争は拡大しつつある。それは、これまで国際関係学において主権の主体とされてきた「国民」という集団が共有し、その集団を構成する要素（集合的記憶・感情・価値）を検証する理論の必要性を示唆している。豊かさを手に入れた東アジアをヒントに、現在の政治の紛争において、国内のポピュリズム・ナショナリズムに内在する紛争原因を、国内世界と国際政治という分析レベルの境界を超えて検証する必要がある。

● さまざまな「和解」を意識した集合的記憶の力学を諸学に織り込む

「和解」とは、個人や集団などの主体を構成する要素が、相互的なコミュニケーション・対話のもとで変容するプロセス、そしてそれと並行して新たな関係が育まれる行為そのものである。しかし、そうした和解は、常に「現実界」での財の配分・そして労働と生産活動にさらされ、他方、制度や団体など重層的社会の中で公共財の創出や配分を意味づける「象徴界」を介して展開される。現実界と象徴界という心理学から流用した概念を使いながら、集合的記憶と感情を社会科学の土台に接合し、行為や意味をめぐる紛争を、三つのレイヤーで深く思考できる研究者を育成する。

● 国際和解学会との連携、アジェンダセッティングのできる人材の育成による、高い社会的波及効果

アカデミア方面において、英語で発信能力のある人材を育成する。代表者も発起人となった国際和解学会の Journal of Reconciliation Studiesは、紛争予防、紛争変革、紛争解決のための関係的、つまり感情的・認知的側面に重点を置く。英国のケンブリッジ大学、米国のジョージ・メイソン大学、ドイツのイェナ大学と連携しながら、国際共同研究を組織し得る能力、英語での発信能力のある若手研究者を育成する。その延長に、集合的記憶と絡まる和解を国際社会でのアジェンダとして設定できる人材育成にも貢献する。つまり、研究を土台として、国際機関やNPOなどの実務分野でリーダーシップを発揮する道もあり得る。普遍的価値と国民的な集合的記憶をめぐる紛争に、しなやかな感性を持って取り組める人材を育成する。

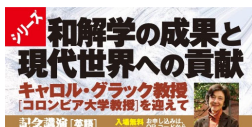
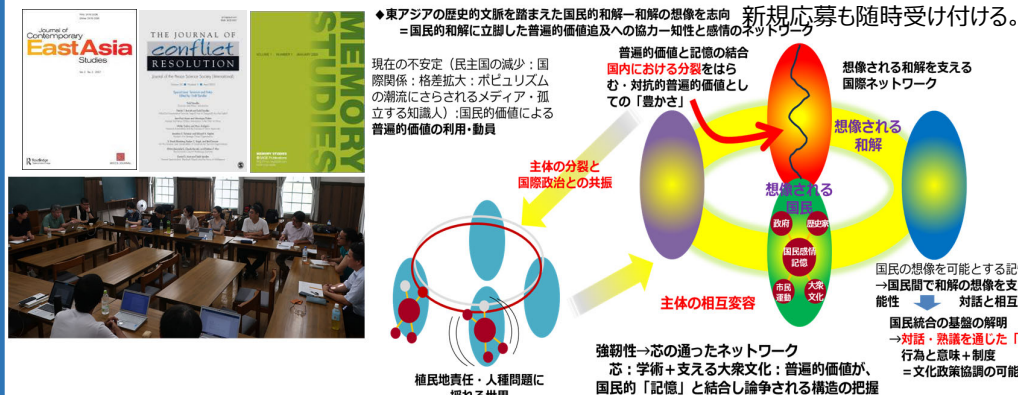


図1 記憶研究の重要性を考えるキャロル・グラック教授（2022年）

誰がこの国際共同研究を行うのか（優れたグループによる国際共同研究体制）

● 早稲田大学地域地域間研究機構・国際和解学研究所を中心とする若手研究者のグループ

- 日本側の研究チームの若手研究協力者は1～3年の間、海外のケンブリッジ大学、イェナ大学、ジョージ・メイソン大学における以下の海外研究協力者、及び、そのもとにある若手研究者と連携して、国際共同研究を推進していく。
- Karina V. Korostelina教授（ジョージ・メイソン大学）はウクライナ出身・アメリカ在住30年の経歴を有し、2018年以降、和解学創成プロジェクトに海外研究協力者として貢献してきた。彼女はアイデンティティ論の観点から紛争と和解を専門とする。従来のナショナリズム研究および紛争解決学を、本プロジェクトで探求する国際和解学へと繋ぐ問題意識を共有する。
- Barak Kushner教授（ケンブリッジ大学）は、すでに数年前から訪問教授として早稲田大学夏期集中講義（東アジアにおける戦争裁判と正義の問題）を担当し、哲学・思想・移行期正義・性暴力と多岐に亘るテーマに地域研究的考察を行っている。
- Martin Leiner教授（フリードリッヒシュー・イェナ大学）は、共に国際和解学会を組織し、現在同学会の会長を務める。ドイツ・日本・米国・ルワンダでの4つの世界大会を開催してきた。その本部を支える和解学センターを同大学で世界最初に発足させ、南米・中東・アフリカ・北欧・中東欧から毎年研究者を受け入れ、活発に活動している。

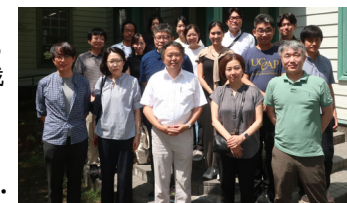


図3 研究会での集合写真（グリーンハウス前）

どのように将来を担う研究者を育成するのか（人材育成計画の内容）

- 多様な分野の若手研究者と共通の手法・問題意識
政治学・歴史学・国際関係学に加え、人間の内面やモラル・規範・価値の問題を細密に扱う哲学・思想・心理学研究者、それに社会とのインターフェースとなる教育学研究者、さらに地域研究者・人類学研究者などが参加する。
- 感情的問題群から5班を構成、3つの分析レイヤー—哲学班
比較と学際的アプローチで、グローバルに国際和解学を発展させる。哲学的心理学的整理により、感情的紛争を呼び起こす5争点と、青、緑、赤で示される3つの分析レベル意識、記憶や感情の対立する「紛争と分裂」、他方の「変容と和解」、両極のダイナミズムを、共通の枠組みで議論。
- 5研究班での連携・継続的議論と在外研究・夏合宿
1人2つの研究班に所属し、チームとしての一体性を高める。著名講師を招き夏合宿開催。在外研究にジョージ・メイソン大学に18名、ケンブリッジ大学に17名、イェナ大学に6名の若手研究者を1-2年の期間派遣見込み。次席研究員6-8名、RA 10名程度を雇用予定。

図4 集合的記憶・価値・感情へのアプローチ

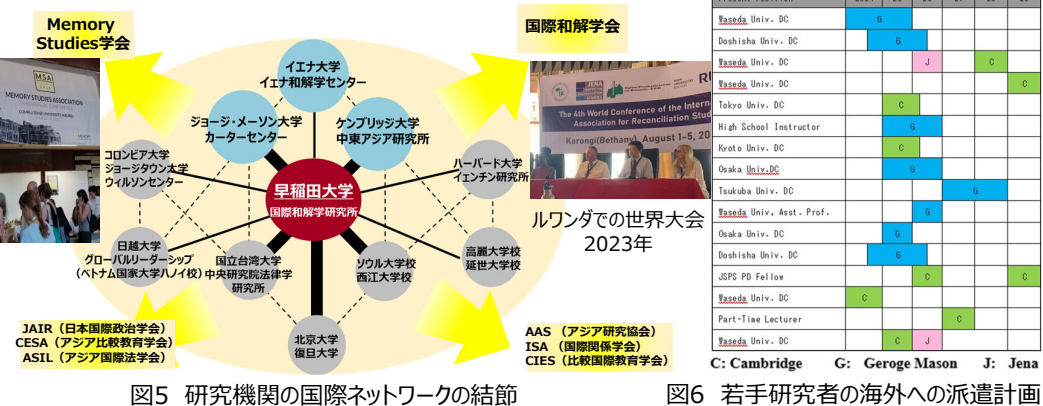
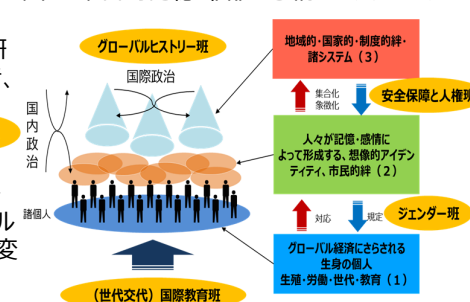


図5 研究機関の国際ネットワークの結節

Present Position	2024	25	26	27	28	29
Waseda Univ. DC	9					
Doshisha Univ. DC	9					
Yasuda Univ. DC			J	C		
Yasuda Univ. DC						C
Tokyo Univ. DC						
High School Instructor			G			
Korota Univ. DC						
Osaka Univ. DC						
Tsukuba Univ. DC					G	
Waseda Univ. Asst. Prof.						
Osaka Univ. DC						
Doshisha Univ. DC						
ASPC PD Fellow						
Yasuda Univ. DC						
Part-Time Lecturer						
Waseda Univ. DC						

C: Cambridge G: George Mason J: Jena

図6 若手研究者の海外への派遣計画